生くる日に

前田夕暮

生くる日に

前田夕暮

大正三年出版

生くる日に

前田夕暮

生くる日に　前田夕暮

大正三年出版

生くる日に

前田夕暮

生ムラ日記
12

空のもと樹は大揺れに揺れゐたり
風さらに吹け樹ようづをまけ

「青樹の歌」より

序

此集に收めた六百餘首の歌は主として大正二年より大正三年に到る約二年間の勞作の中から撰拔したものである。

自分はこの歌集「生くる日に」一卷を以て、最近約二年間の自分の生活を裏書きするものとして世に發表することを喜ぶものである。何となれば自分は第一の歌集「收穫」よりも、亦第二歌集「陰影」よりも、自分にとつては

此「生くる日に」一卷が最も自分に直接性を有し、最も自己の牽引を感じ、自己の生命の流動を感ずるかのやうに思意せられるからで、自分は初めて明かに自分の姿を此一卷によつて見出し得られたやうに信じられるのである。

憶ふに「收穫」は自分をして歌壇の水平にまで引きあげてくれた忘れ得られぬ歌集ではあるが、渠は若き日の短かき夢の悲しきおもひでとして、纔かに心の隅にほの光るのみ。「陰影」は不徹底なる我が生活の停滯期に生まれたるあはれなる低能兒にして、徒らに自己を憐

れむの情に堪へぬものがあつた。然し「生くる日に」に到つて、自分は初めて自己の藝術に一種の歡喜と心の勇躍を感ずることが出來た。

さりながら自分は猶飽足らぬおほくのものをもつてゐる。自分は決して今日に滿足するものではない。更らに新らしき道程に上らむとするに際し、謙遜なる心をもて此一卷を世の識者の前に捧げて、忌憚なき批評と教示とを仰がむとする「もの」である。

終りに本書の表紙と挿畫を畫いて戴いた坂本繁次

郎氏の好意を心より感謝する。

大正三年八月十二日夜、わが若き
讃謨の樹の前にて

前田夕暮

深夜の窓……(一)……大正二年作
沈思と外光……(五七)……大正二年作
青樹の歌……(八九)……大正二年作
外海と岬……(一〇九)……大正三年作
地上……(一五七)……大正三年作
向日葵畠……(一八七)……大正三年作

裝幀及び挿畫……坂本繁次郎

生くる日に

前田夕暮

深夜の窓

大正二年作

自大正二年一月
至大正二年八月

沈默ぞわれをいたはりなぐさむる今日も草場
に來て見入る空

わが行くはひろき草場のはつ冬のうす日だま
りぞ物思ふによし

黄に枯れしひろき草場のそのなかにわれ空を
みて今日も坐せりき

妻もなく仕事もあらず家もなき一浮浪者ぞ草
場にくれば

我がこころの故郷つひにいづかたぞ彼の落日
よ裂けよとおもふ

打ちもだし酸ゆき蜜柑を吸ひにけりたゞわけ
もなく悲しかりしに

われひとりをたのみて心寂しきに野に來て眞
晝枯草を焼く

塚の如くつまれし草に火を放て焔ちぎれて青
空にとべ

夕日赤しわが歸る家に氣病みして君はぬるら
む、あぢきなき世ぞ

ねてゐよ、君はねてゐよ、おとなしく君は子供に
かへりねてゐよ

素直なる心守りてありし日のわが悲しみにあ
ふよしもがな

うたたねをしてありと思ひうかがへば君さに
あらず物思ふらし

一杯の赤酒の酔ひに悲しみをまぎらはしぬる
か白き夜床に

日をつつみよなふる山の麓邊にわがししむら
を生き埋めせむあるとき

護謨の樹の青のひともと眼に遠しわが世のは
てにゑがく護謨の樹

あかあかと心狂ひてとびめぐる夕日に投げし
ししむらのうへ

沈默の黑き木立に空遠く日はてりきたり日は
かげり行く

壁の如く暗き木立のそそり立つほとりに行き
て心かへらず

*

夕日よ、夕日よ、夕日よと心狂ほしく渦卷きて行
く空燒くるかた

入日あかし農夫が負へる枯草に火を放ちなば
慰むべきに

あはれわれ落葉林に焚火してこころよろこぶ
けものの如く

うづくまり林のなかに火を焚けばわが心さへ
あたたまりきぬ

「故郷」にかへるおもひか火を焚けばあたりあか
るし落葉林は

ゆふべ林に焚火をすればあかあかと木々の肌
の眼にせまりくも

闇ふかき林のなかに火を焚きつややとほざか
りみてありしかな

みちたらへる心に似たるあたたかき悲しみき
たりわれ醉はしめよ

雪の夜、街にて

まはだかの心にふれてしらじらと夜を雪のふる、眠れる市街

葉の青く實の赤き冬の深山木のなつかしきかな夜を雪ぞふる

雪の日、野にて

雪のうへに空がうつりてうす青しわがかなしみぞしづかに燃ゆなる

ほゝと光り空よりきたりうす青き野の雪のうへ燃えて消えにき

とある夜、街にて八首

我が前に窓かけをひけ暗くひけ鬱々として物を思へる

わが前の黄の窓かけのややにくらくなりゆく暮れぞ物思はるれ

瓦斯くさき暗き宿屋の部屋のうち陰惨として夜をめざめたり

水銀の如く心は重かりき二月の夜をひとりめざめつ

あかつきを心に感じ感じつつ別れの手紙かきてゐしかな

走り行く舗石の上、走り行く深更の町われとかなしく

壕の水夜をうす光り烟突ぞ空に火を噴く、われひとりなり

壕ばたのくらき宿屋の二階よりみれば悲しや黒き烟突

病院にて妹の手術受けしとき

手術後の魔酔にあをみわたりたる妹の顔を無言にぞみる

手術後の顔にかけたる白布のなまなましさぞわが心刺す

大川の薄暮の光りうすらかに來てはまよへり
黄の窓かけに

たそがれは烟の如くなびきたり大川の水の光
りかなしも

大川の水のにほひのうすらかにわれの心に沁
みわたるかも

大正二年三月、三浦半島をめぐる。
その折りの歌二十一首

三浦三崎の女盲人が路ばたにうづくまりゐて
菜種黄に咲く　以下三崎にて

日が暮るるやと空をあふぎて歎きたる女盲人
の悲しきかなや

路ばたに居すはりて泣く小盲人を女と知りて
悲しかりしも

青き菜種の莖を喰みをる蓬髪の女めくらに日
が暮るるなり

海を越え三崎に來たり海をみず女めくらをひ
たにかなしむ

枯草のなかに崩えたる砂山の青草を摘み青草
をつむ

冬草の青をことごと摘みすてむ岬に來たりう
ら悲しきに

海草を干せる砂丘に日は赤し海にむかひて思
ひしづめる

房州の山焼くるみゆ行き暮れてこの砂山に身
をなげにけり

古壺のかけらに似たる夜の港亡靈の如く汽笛
ぞ鳴れる　以下浦賀にて

三味線の音のみが生きて夜の古き入江の町を
まよふなりけり

夜泊りの黒き汽船のなかに鳴る鐘の音小さし
古入江町

ひたひたとひたひたと浪夜もすがら古き入江
に鳴るは悲しも

夜あくればまじまじとして日は照れり廢船の
うへ古き入江に

對岸の古き家並に日が照れりよごれし旗の風
になびける

しらけたる日のかげまよふ古入江鷗の死骸浮
きてながれず

さ青なる入江に浮ぶ船にのみわが悲しみの流
れてつきずも

蹌踉として人は歩めりうすくらき入江に添へる陰影おほき町

暗き沖へ暗き沖へとわが心ながれてやまず海の鳴れるに　鎌倉にて二首

海鳴りをきけば心に何ものか入り來るごとし暗夜の渚

＊
＊＊

あか〳〵と太陽はただよへり大空は風濁りな
せり、心沸くごとし

へとへとに疲れただよひのぼりゆく赤濁る空
の太陽に、わがこころ

みてあれば赤く濁れる太陽は血を噴くごとし
空は暗かり

氣ぞ狂ほし赤潮の如く一面に風濁りなせり暮
春の空は

若者は青草にぬる牛の脊をひしひしとうてり
その鞭の音

とある農家の暗き廐に、低く垂れたる頸を、左右に絶えず打振れる病馬をみたり、歌十一首

ゆふべなりき暗き廐に亡霊のごとき馬ゐて頸振りてゐき

みてあれば心よろめき獣めく、暗き顔なし頸ふれる馬

頸ふり馬、頸をふれるに日は暮れぬ廐のまへの一もと臭木

夜もすがらねむらで頸を打ちふれる獣を思ひこころ慰まず

飼主も氣が狂れにしとききにけり臭木の花の青じろむころ

紫がかり黒みをおびし臭木の葉重く心におひ
かぶさりぬ

蕚赤く花青白う叢りて日蔭にたてる臭木の寂
しさ

黒みたる廣葉を風にひるがへし日の光みぬ一
もと臭木

頸ふり馬いまだ死なざり臭木にはうす青みた
る實のなりにけり

呼吸つまるごとし氣がふるゝ如し臭木の葉、一
葉をつめば顔にあつれば

黒みたる臭木の葉もて太陽を掩はむとする、う
ら悲しさに

温室の歌

顔中に熱きゝすをば感じたりめまひなしつつ
温室に入る

心臓に血ぞさかしまに流るごとしわが眼に近
く日ぞ渦巻ける

ぐろきしにやの葉が我が顔をつつまむとする
なり春のゆふべは赤し

血をはきて死にたしとおもふ温室の春のゆふ
べのうす暗がりに

乾きたる花粉はとべり呼吸つまるごとし薄暮
はうすら光れり

甘酸ぱく蒸しかへされし植物の花のにほひに
わがむせにけり

わが皮膚は一面にみな汗ばめりきちがひ花の
赤きを見入る

温室にヂューの娘とあひびきのかかるゆふべ
をまぼろしにみる

温室を馳せも出づべく心燃ゆはやはや君を見
にかへるべく

温室の春のゆふべをよろめきてわれいはれな
く泣きたくなりぬ

とはに處女(をとめ)にかへりあたはぬかたしみを君は
おもふや椅子のうへにて

人間のまして男の強きにほひ部屋にまよへり
木蓮白き

春の木になかぬ鳥ゐて日はあかしさびしきは
わが生命なりけり

野の監獄の歌

來てみれば我(わ)が眼に近く監獄ぞ大空のもと野
にあらはなる

囚人等己が捿家(すみか)の監獄の屋根つくろへり、五月
の夕日

日光の赤濁れるにわが心監獄のそとを駈けめぐるなり

あばれなる人間どものふるさとの悲しからずや夕焼くる空

粗き日の光りのもとに監獄ぞあらはに立てる、煉瓦塀ながし

四人等牢獄に接めり蜜蜂の巣にこもるよりあはれなるかな

日光を十年もみずばいかならむ彼の屋根のもとに接める人おもふ

日光を見ぬことといよよながくして空の青さの眼に深むらむ

囚人等輪をなし歩む牢獄のゴオホの繪をばおもひいでにけり

監獄のなかにて鳴れる小さき鐘わが心うつ、野に日赤けれ

人間のかなしみに醉ひうたふらむ望樓に灯の青む夜ごろは

みだらなる小唄あはれに村娘監獄に近く糸繰れる家

路のへの暗き家よりわきいづる夕日のなかの唄のかなしさ

眼病院にて、七首

我が父を眼病院にともなひぬ冬青の葉のなかの白き病室

父の眼をみぬやうにして病院の大時計をばみてありしかな　控室にて

冬青の葉のべつたり濡れて病室の窓の硝子を青く塗れるも

硝子越し冬青の青葉の濡れたるがわれの心に觸るる心地す

冬青の葉のぬれしがうすら光るなりましろき病室にたそがれぞくる

雨の日の控室の隅にうづくまれる男の見えぬ
眼の悲しさよ

すがめなる若き支那人の色あせし青色の服雨
にぬれたる

＊

黒きだりやの日光をふくみ咲くなやましさ我
が憂鬱の烟る六月

しぼみゆく黒きだりやをみてありぬ我等が過
去を思ふかたはら

我が心をしどろもどろに染めにける青き繪の
具の如きかなしみ

ぬれし布つかむが如き心地しぬおもはぬ友の
手を握りしに

楓花の死を悼みて

まことにも孤獨といへるかなしみにひたりて
汝れの死にて行きけむ

悲しきは行路病者の名のもとに汝を葬りし墓
の眼にみゆ　以上二首

腹白き一羽の小鳥木ぬれよりつぶての如く地
におちにけり

小鳥はも翅地にすり旨ひし眼の膜うすらにも
わがかたをみる

手握れば小鳥の生命波打ちて小指に強くうち
ひびくなれ

＊
＊＊

赤くにじめる日没と白くけむる花、草いきれ強
し空氣よどめる

蒸すがごとき草いきれする草塲のなかわがし
しむらをはこび來にけり

ししむらのうへ這ひまはる蒸しあつき草いき
れに我れも腐り行くごとし

いかにその空想のほしひままなるぞ草いきれ
するなかに吾をながめし

我が眼くらし草いきれする夕闇の草塲のなか
にめまひをおぼゆ

草いきれ重くにごりて澱みたる空氣を吸ひぬ
魚の如くに

そこらに、草いきれする野のなかに悲しき人間
の横はりゐずや

大空をながめてゐしにいつしかに我が憂鬱の
こゝろかへりきぬ

街にて、二首

ニスをもて我が心塗れニスをもて我がこゝろ
塗れ、無口の男よ

ひり〳〵と心の痍の痛みいづ夏の夕日の街を
歩めば

唯つぐみてだいあをみるに如くはなし日光を
みてあるに如くものはなし

引窓よりふと見上げたる七月の濃青の空の身
に泌みるごとし

ちぢれたる我が髪の毛のちりちりと燃ゆるを
おぼゆ日向に出づれば

青樫の枝

ほいほいと青き枝をば手折りたりわれと悲し
く林に入りて

青樫の枝を手折りて地の上につみかさねけり
冷たき青葉

向日葵の花

あぶらぎりたる日光のなか向日葵はわが世の
隅に黄にたてりけり

めざめたるそのひとときの目の光、まひのな
かの向日葵をみる

向日葵に餘りに近く我が顔をよせければにや
みうち燃えぬれ

*

黒き夜の大いなる蛾ぞわが背に這へるを感じ
呼吸つまるごとし

つとおさへたる夜の大いなる蛾の生命指さま
よりぞ脳にひゞくも

一輪の黒きだ、りあ、ぞ底暗く夜をふくめり我が
前にありて

沈思と外光

大正二年作

自大正二年九月
至大正二年十月

九月狂病院を訪ひて
歌二十五首

狂人(きちがひ)のにほひからだにしみにけり狂病院(きちがひびやうゐん)の廊
下は暗し

扉(とぼそ)あくればそこにも強ききちがひの匂ひただ
よひ皆默(もだ)したり

魚のやうな眼のみ生きたる四五の顔こなたみてあり廊下とほれば

一室のうちに數人のきちがひが皆立てりけりむきむきになりて

蓄音機の喇叭の前にあつまりしきちがひどもの顔の暗さよ

彼等のほけたる顔よかなしきは人間に似る生きものにして

きちがひの眠れる部屋にあかあかと狐のかみそり一面に生えよ

長き廊下の彼方の暗き一室の扉がばたりとざされにける

はたはたと蛙のやうに部屋ぬちをとびあるき
たり彼等の一人

「此の男は直きに死ぬる」とまのあたり醫員がい
へどうごかぬ瞳よ

その男の動かぬ魚のやうな眼がわが背をみず
か部屋をいづるとき

眞面目なる常人の顔をしてゐたり精神病學を
よみし彼等の一人

よくみれば瞳の底ひ夜の海の光りをふくむ彼
等の一人

とぢし眼の顔を打ちふり打ちふれり壁にむか
ひし彼等の一人

うづくまりし彼等のさまは穢れたるかんばす
に繪の具なすりしごとし

あかい、あかい、あかいと女きちがひがきちがひ
文字を書きてゐにけり

うらわかき女きちがひの眼の色をみてゐしが
わが眼とぢられにける

きちがひの光る眼にわが眼似ずやとおもひ友
の顔みる

さらに扉ひらけば女狂人の頰あかきがゐて物
いひにけれ

海底の人魚の群れか一列にくらき廊下に並み
て飯はむ

日没ちかき廊下にならび飯をはむ彼女等をみたりはじめてみたり

めとづれば眉間のあたりきちがひの顔ぞうづまく風の如くに

狂病院の玄關前の小石原ふめば小石のわがこころかむ

歸りて二首

狂病院の扉のはんどるの冷たさをいま猶指は感ずるごとし

狂人等晩夏のあかき外光のなかにうよめく運動場をおもふ

＊
＊＊

沈思よりふと身おこせば海の如く動搖すなり、
入日の赤さ

このやうな平地の上に赤い日よ生きもののや
うに落ちて來よかし

草の上つとたちにける我が眼のうち夕日鋭く
裂けてみえにけり

野の烟突を這ひおつる日の大きさよ蛇の屍(かばね)の
地に裂かれたる

落日に烟れる世界、一面に野はただよへりわが
眼のあたり

はつあきの野の外光に火葬場の烟突が赤し、蜀黍畠

野の並木黑く列なすあひだより病めるがにたてり、赤き烟突

ひとところ九月の夕日よどめるに野の烟突は烟を吐かず

烟吐かぬ赤き烟突の直ぐ下の畠に農夫が蜀黍を刈る

蜀黍を車に積みて物いはず農夫烟突の方に行きけり

*

むかふより汗みどろなる兵隊が靴ひきずりて來たれり、西日に

兵隊の赭土色の横顔を汗流れたりねむさうな
眼はも

兵隊のねむさうな赭い横面の列が我が前をよ
ぎりてぞゆく

兵隊もかなしかるべし西日さす野のほこり道
行かねばならず

兵隊は獸の革のにほひなすにほひを殘し西日
に行けり

打默し行く一群れの兵隊のかたはらの草に夏
の日が燃ゆ

兵隊はくさき烟草に火をつけてむさぼり吸へ
り夏草のなか

野にいこへる兵隊はみな無口なりなかの一人
の草をむしれる

兵隊のねむさうな眼に授胎後の草が黄ばみて
うつるにあらずや

兵隊が悲しさうなる眼つきして吾をみあげぬ
そばを通れば

＊
＊＊

油ぎりし日光のふる谷町の工場に今日も煤烟
をみる

工場の屋根上にしてむさぼりしわが空想に煤
烟のふる

うら若き女給仕に物いへどいらへず人に疲れ
し眼をせり

つと一人日光のなかに走り出でし男ありけり
工場の裏庭

晝休み二階廊下に髪を梳く解版女工の指の汚
れたる

ライオン工場の白き服きし女工等が庭にたて
りき日光のなかに

＊

うすくらき口入屋の前をとほりしになかにて
人らうよめきゐたり

わが電車埃まみれの遊女屋の前を西日にひた
走るなり

われひと夜町の旅館にねむりけり帆布(ぬの)の如き
まどかけのかげ

病める窓、病める夜の壁船室に似しこの部屋に
ともる電燈

街上の時計ぞ夜の胸をうてり、闇につめたき金
屬のこゑ

ひとつ〳〵街燈(ひ)を消してゆく消燈夫の暗き背
をみたり旅館の窓べ

*

うしろむきに椅子によりつつ黑髪のさきを編
むなり物おもふ妻は

何物をも征服なさではやまぬこころさびしや
眞晝だりあかしも

おそ夏の河岸を二人の勞働者ビーア樽をばま
ろばしゆけり

よごれたる鷄の翅をみてゐたり歩みつかれし
おそなつの町

町なかの埃まみれの軒下の鳥屋に日がさし白
鷄のゐる

＊＊
＊

妻としてとある日くろき畑道をゆきけりのび、
る、路傍に青し

路ぼたの刈草の上に農夫の兒農夫の兒とし蜀
黍はみてゐき

もろこしをとりつくしたる黒土の畑中に立て
り農夫の妻は

農夫の兒畑中道の窪地にてのびるつみをり
びるはくさし

蕎麥の花つめたくしろく眼の底にのこれり妻
とかたらひゆけば

路ばたののびるをつめば忽ちにその強き香の
夕日に散れり

秋の日に二人あらはに照らされて歩みてゐた
り赤土路を

吾等悲しき職業を捨てむと語らひつ黄の秋草
を踏みて歩みし

野の牧場の牛飼男われに背をみせて日向に草刻むなり

日のささぬ牛飼部屋の板敷を牛が蹴るらしゆふべ近きに

けだものの強きにほひにつつまれて秋草のなかに牛をみてゐし

＊

武蔵野の古驛路の遊廓の日にさらされて向ふにみゆるも

古き町いでて一路の黄の光り稻田のなかをわれら行きにけり

十一月の日光のあまさ農夫らの顔の眞面目さ麥まきゐるも

武藏野の野少女ごもの稻を刈る鎌日に白し、唯稻を刈る

稻を刈る彼等野少女稻を刈る彼等若者日に眞向ひに

田の畦の黑きを走る野少女は鼠のごとし日はてりかげる

畑中道向ふより來し赤犬の何おもひけむふとかへり行く

火葬場の烟を吐かぬ烟突を背にして吾等口つぐみけり

石積場のすみしにかがみてさびしげにかたれる人の妻のいとしさ

野の夕日吾等淋しき幸ひにいたはられつつ歸
りゆかなむ

青樹の歌

大正二年作

自大正二年十一月
至大正二年十二月

憂鬱の青のゆづり葉言葉なく打默したる青の
ゆづり葉

空青み、われに親しき冬の日の光はそそげゆづ
り葉のみに

我心鋭く冷たく生きてあり親しきは冬の木の
さ青なり

葉の青く莖あかみたる冬の木ぞしたしきした
しきわが冬の木ぞ

ゆづり葉は黄葉することさらになし彼のうま
ずめの寂しさに似て

黄葉せぬ樹を植ゑしめよ我が思想にしたしき
冬の木を植ゑしめよ

＊

我が庭に一もと青きゆづり葉の樹を植う初冬
の日光ぬくし

うす赭み濕れる土を深く堀り葉もたわわたる
ゆづり葉を植う

ゆづり葉は青き葉と葉を諸向きに打ちかさね
冬の日にたてりけり

掘りかへされし土の上にそと我がぬくき掌を
おきてみぬ初冬の日光

數人の男きたりて打ち默し木を植う、青き木を
めぐりつつ

新らしく植ゑられし木の前に立ち日をあふぎ
みぬ初冬の朝

妻よこのゆづり葉の青く黑みたる葉の冷たさ
に指ふれてみよ

太陽の强き光りに飢うる樹のその葉の青く廣
きは悲し

わが好きはゆづり葉と護謨と青樫のそのいづれもの青き葉の色

日のひとつかかれる空になびきたる護謨の林をつねに思へる

護謨の樹の青にほのさす日の光り土ほかほかとぬくもりにけり

温室のくもり硝子に護謨の葉の青くうつりて外面雪ふる

護謨樹の鉢を日向にいだせわが心もまた日光のなかにいづべく

わがこころのふるさとの色青の色南あめりかに生ふる護謨の樹

樹に風鳴り樹に太陽は近くかがやけりわれ青
き樹にならばやとおもふ

空のもと樹は大搖れに搖れるたり風さらに吹
け樹よ渦をまけ

靜かなれ樹よ靜かなれ日は低し汝れも生きも
の悲しかるべし

靜やかに、その葉を垂れて悲しめるゆづり葉を
みれば心傷むなり

雪はにがき杏仁水のにほひしてわがゆづり葉
にふりつもりけり

＊

熱ちらちら醉へるがやうにさして來ぬ寢ぬる
は悲し日のてる部屋に　以下病中作

熱やめる身は青樫の青き葉をまき散らしたる
なかにいねまく

ぬれてひかる大きなる青き木の葉など觸れま
くおもふ熱身に沸けばば

熱を病み寢る淋しさは青空をみぬゆゑならむ
朝の霜白し

＊
＊＊

朝、街を行けば悲しき勞働者その勞働者にわれ
もまじりて

わが生くる日の朝の町初冬の太陽の舗石に光
りしたしき

冬の朝の空の青きにゴシックの高き建物をみるはかなしき

太陽にむかひて建てるまはだかの建物の窓より窓に眼をうつしみる

わが行くは初冬の朝のまはだかの町の舗石しろき舗石

こころよき初冬の朝の食慾の健かなれば町を急ぎし

軟かき朝餐の麵麭の味のよさ初冬の朝のうるこころはも

＊

この身内のたぎる力に街を行き煤烟をみる空うす青し

うす青み消ぬがにしてはただよへる暮れのこる空町の上の空

大空は青くにじみし濡紙のごとし心はふかく呼吸する

青空の方に心をひたにひくこの煤烟の生けるがごとし

冬の夕日のまことにまことに大きなる街の烟突太き烟突

青空はわれのこころのまうへなりその青空に煤烟なびく

＊

武雄はも北陸前の連山の雪光るみて冬やむかへし　二首、武雄に

今宵はも子を抱きて早寢せしならむあられや
降らむ汝が陸前は

朝早く汝れは大和の僧院に米とぐといふ霜の
ふれるに　雄郎に

＊

風鳴るは青ゆづり葉か樫の葉か今宵を友と酒
くみかはす

樹々の葉の風に鳴る夜を酒を煮て吾等が生く
る日を愛しみぬ

魂を吸ふがやうなる冬の夜の深きためいき身
近かにぞきく

ムンヒの「臨終の部屋」をおもひいでいねなむと
して夜の風をきく

外海と岬

大正三年作

白大正三年一月
至大正三年二月

一月。南上總に遊ぶ。海の
歌其他六十一首

黝みたる海はうづまき大空は風焼けすなりわ
れは旅人

砂に埋れて黒き屋根のみ見する家砂山の家鷗
群れ啼く

誰が家ぞ砂に埋れて雜草の枯れたる屋根を黑くみするは

*

卓上の銀の時計に打ちひびく暴風する夜の海の底鳴

隣室のましろきべつどわれひとりさめて暗夜の暴風をきけり

黑々と垂れし帆かげのうつりくる古き旅館の夜の硝子窓

大魚數多渚のうへにうちあぐる如き音して海くれにけり

硝子戸のそとは海なり黑々と生きて動けり日の暮れ行けば

夷隅川青き彼方に斷崖のしろくひかれる岬が
みゆる

砂山にのぼれば黑き海うごくその外濱の干鰯
干しども

＊

砂山によろめき立てる旅館あり人棲まずして
冬の日低し

雲雀に似て風に追はるる名無鳥ちゝと砂丘の
枯草に入る

砂山の砂を吹く風生けるごと砂を吹く風、日は
かげりゆく

日に白き斷層面をさらしたる岬をみむと砂山
のぼる

砂山の埋れし家の屋根瓦黝きをかへしのぞき
みしかも

腹白き巨口の魚を脊に負ひて汐川口をいゆく
わかもの

濃青なる汐川口に沈みたるボイラアのありて
赤錆びにけり

川口の半ば沈みしボイラアに外海の日の赤濁
りたる

小石投ぐれば水を彈きてボイラアの前におち
けり、青き川口

川口に立てば西風砂を吹き砂を横吹く、日の色
かなし

外濱の風焼空の下にしてほしかほすなる無口の男よ

ほしかほしの黒きかげのみそこここに動きて西日、風砂を吹く

萬祝着たる漁夫のふところでわがそばに來て物いはずけり

太東岬に行きてうたへる

岬へと河をわたれば渚邊は砂鐵に黑み日に光りけり

潮疾く青浪さわぐ河口をわが船横切るその河ぐちを

太陽を友達のやうに話したる老船頭のかほの
おほきさ

對岸の崖はひあがる船頭のふりむきし顏の赤
かりしかな

日に黑く砂鐵の光る外海の三角洲をばわれ等
行きにけり

岬の麓立枯れ林しらじらと海にむかへり砂原
くろし

蜑少女くろぐろよりて立枯れの林のなかに火
を赤く焚く

船骨の赤錆びたるが鋭くもわが眼に入りぬみ
さきの林

廢船の碎片が砂に埋れたり錨は赤く日に錆び
にけり

斷面はしろく鋭く外海のあをきにむかひみさ
きぞ尖る

鎌の如く白く鋭く尖りたる斷崖をわれら這ひ
のぼりけり

青浪に眩暈おぼえて尖りたるみさき斷崖われ
らぞつたふ

唯われらわかぬ力に牽かれつつ斷崖をよぢ斷
崖をよづ

岬はも小さなりける人間を數人のせたりその
斷崖に

岬頭の巖は尖りてまはだかに空にそそれり青
海、青海

斷崖の上にはらばひわが生命かけて摘みける
濱防風ぞ

眼をつぶりて崖のうへよりわが顏をつきいだ
したり青海の上

生きもののなかの小さき人間の生命いとほし
斷崖のうへ

わが妻を物めづらかに岬頭の枯草のなかに見
出でけるかな

海の力きたりてとどろおびやかす岬は生きて
動きいづるや

勝浦より御宿まで

青海はややくろみたり山々はまろく岡めく
總の國行く

冬銀杏灰白色に日に燃ゆる海そひまちのあを
き病院

日のあたる岬の山を青海の彼方にみつつ總の
國行くも

岩山の青樹を風があふるなりその下をわれ海
みつつ行く

陰影おほき小さき港のそこここに海をいだけ
る總の國はも

ほたほたと赤花を散らす一老樹風のなかなる
一樹の椿

青海は青し椿はあかかりきその海くろみ日は
かげりけり

風波の騒ぐ海邊を赤椿たわわに手折りわが行
きにけり

海岸の一坪程の青菜畑日がいつぱいにあたり
てゐたり

赤き帆の房州船が泡立てる海にかたむきかた
むき走る

大鰯網からだに卷きて漁夫等の一列が行く日
の外濱を

白痴でんざうは老いたる鴉の如し、默々として來たり默々として去る。銅貨一個を與ふれば、追分を歌ふ。その聲錆びたる金屬の如し

でんざうは頸くくりける頭取のねまき着古しふところでせり

でんざうは默々としてうす青き菜畑の隅に物を喰めりき

黄なる蘆刈れる女の赤き帶でんざうぞみる彼も生きもの

冬青の實の赤きがもとにうしろむき歌へる彼のふところでかな

でんざうは鴉の如し外濱に干鰯を喰めりくろきほしかを

砂濱の干鰯を喰みしでんざうの口ばたにつき
し黑き荒砂

砂山のうもれし家の屋根上に日なたぼこする
彼も生きもの

二月はじめ、安房の外濱をめぐる。
歌すべて七十一首

わが眠らざる旅館の窓べ苦しき苦しき鋭き冬
の曉きたる

苦しき苦しき一夜はあけぬ底深き冬の朝空の
青の冷たさ

停車場の時計の音のかくばかり鋭きひびきを
きかざりしかな

白塗の朝の停車場に鈴が鳴るわが痛む胃のこ
の鋭さよ

一枚の赤き地圖をば停車場の賣店に買ふ冬の
朝あはれ

停車場の待合室の大きなる素木の卓にわが手
紙かく

朝の停車場待合室の硝子窓青きに搖るる常盤
木の群れ

停車場の待合室のストーヴに燃ゆる石炭わが
背ぬくしも

房總の國境、おせんころがしの崖上の
一茶店に宿りて

崖下の夜の深海のふかぶかと呼吸してありし
底ひ暗きに

部屋の隅にたてかけありし大きなる黑き洋傘
の闇にみゆるも

わが夜着の裾にねむれる生きものの體温をわ
れはなつかしみけり

さかしまに吹きおろし來し風の音夜の深海の
底にいりしか

はたはたと帆が風になるごとき音この崖上の
家のうしろに

地を這へる崖上の家、うすあかき灯ふき消しわ
が眠りけり

地の底にとどろと鳴れる反響を海と知りけり
夜は暗し暗し

※

日蓮の生れし國の外濱に入日のひかりあかく
とさす

岬また岬まはれば荒海に入日するなり日蓮を
おもふ

日蓮の強きこころにひびきけむ外海の波、風に
とも鳴る

日蓮の生れし國の海岸に大魚かなしや血にま
みれたり

けだものの肌なす岩にくろき腹みせて日向に
海鮫死せり

大男二人してになひきたりたる大魚の長尾砂
をすれるも

日のあたる小湊村をゆきすぎてわが日蓮を思
ふなりけり

日蓮寺の錆びし小さき青き鐘廻廊に低く吊さ
れし鐘

青き鐘その音をおもひ松風の寒き山門をわが
ぬけにけり

おほきなる黒き洋傘さし海岸を行く蜑少女、鴉
むれ啼く

わが前の砂山の草に雨こぼれ彼方の岬日があたるなり

黒き洋傘彼方砂山のぼり行く黄の枯草に雨あたたかし

からからと帆をまく音し冬の海黒き縞なし夜となりにけり

岬のいけす、五首

日の入りし海岸を行き底暗く深きいけすをわがのぞきけり

暗き水ところりところりと底ひより動くなりけり岬のいけす

海はくらくいけすはさらに暗かりきけけろと
啼きて空わたる鳥

いけすは暗し、のぞきてあれば生きものゝ魚の
にほひの漂ひにけり

岬はづれの黑き岩をば堀りさげしいけすの底
に棲める魚はも

*

どんぞこの夜の渚べにきほやかに焚火が燃ゆ、
崖の樹はよろめきて

焔あかくゆらめきのぼりわきあがり崖の青樹
のむらがり騒ぐ

崖上より寂しくなりてながめゐし、焚火よ焚火
よさらに燃えねと

岩の上に投げいだされし腹しろき魚生きてあり、焚火の光り

一かかへの石抱へきつ放りぬれば崖下の海けうとき音すも

投げにける石の深海に沈む音われの生命に暗くひびきし

野島岬にて、うたへる

夕日岬に赤く濁りてかがめ焼くのろ〻烟地を這ひにけり

人數人ありて岬にかがめ焼く夕日のなかにその影くろし

我がまへに黒き帆船が大波に搖られゐるなり
岬の夕日

黒き岩はみな觸角をもてるごとし夕日あかあ
か岬にしたたる

尖りたる岬の黒き岩の上茶色帽子をわがおき
にけり

巖かげに焚火のあとの黒かりきたんぽぽが咲
く夕日うすらに

黒き帆が我が顏の直ぐ前を行くに呼吸つまる
ごと我れはみつめぬ

廢船の赤き巖かげに傾きて夕日いつぱいにう
けてゐしかな

ことゝことと古ぼろ船に錆釘をうつ漁夫あり岬
はづれに

白き魚手にさげひとり言しつつ來にし漁夫と
顔みあはせつ

ひとり言しつつ平たきあから顔我が前を行く
にわれも悲しく

岩の上よりつとびしかば我が足の冷たき砂
のなかに埋れし

岬に白き牛ぬて啼けり

吾と牛としばし眼と眼をみかはしぬ淋しきと
きに人のする眼を

牛の前にわれうづくまりのぞきけり深海に似
たるその黒き瞳を

夕日のなかに牛の狂ふをみつつわれ遠のきて
強く石投げにけり

牛の額めがけて投げしそげ石の火の如くとぶ
夕日のなかを

ひじきとり海苔とる少女われの眼に黒くうつ
りて岩尖りたり

夕日のなかに着物ぬぎゐる蜑少女海にむかひ
てまはだかとなる

この他國の旅の男にあか〳〵と焚火をすなる
蜑少女ども

蜑少女焚火をすれば夕闇の空をけゝけゝと鴨啼きすぐる

蜑少女焚火なしつつあらはにも悲しみにけりいかにせよとか

*

大搖れに搖るる我が船わがからだ海はわきたつ油の如し

船室の大かけ鏡ときをりに白くひらめく汽船傾けば

船客の黄いろき顔の二つ三つ鏡のなかに眼をとぢゐたり

のびあがり窓よりみたる砂山の警報標の赤かりしかな

さんさんとデッキにあたる雨の音風はマスト
に高鳴るらしも

地上

大正三年作

自大正三年三月
至大正三年五月

風激しく小砂まじりの煤烟をわが横面に吹き
そそぎけり

風激しく驛標(ていひやう)をゆりて吹けりけりさと煤烟の
渦巻きすぐる

風激しく我が頰をふきつ煤烟は我が眼に入りて針さす如し

しくしくと我が眼痛みてひらかれず涙ながしつわが歩みたり

＊

わが病める妻の枕べほつねんと坐りてあればひとみは暗し

白粥をたうべんとしてわが妻はおきいでにけり夕くらがりに

＊

野のなかの一もと木蓮花ひらく前の木蓮幹光りたり

木蓮は地上に搖れてゐたりけり少年數人樹にのぼりたる

苔白くふくらみし樹に少年がよぢて青枝ほき
と手折るも

われら野に大聲あげてわらひけり夕日は太き
烟突の彼方に

かけおちの不義者が二人ねてありし野木の下
かげ草青みたり

そこここに兵隊の馬がはみこぼしし大麥が青
く芽ぶけり、林に

ふつふつと地にこぼれたる大麥の殼破りつつ
さ青に芽ふけり

軟かきけものの肌のほつかりと地面ぬくみて
草の芽ぶける

日の方に枝をのべたるかはやなぎさ青に芽吹
くゝわが手折りけり

野のなかに三味線が鳴るふとみれば輪のかた
ちして人群れゐたり

野の黄なる枯草の上に日がそそぎ野劇團こそ
いま芝居すれ

あさましや中年者の眼のひかるおやまの顔に
日があたるなり

しかすがに彼れもおやまのみだしなみだらり
の帶のあはれなるかも

野のなかに淺黄幕張り忠臣藏すると三味線鳴
りいでにたれ

のつそりと定九郎はも日光のそそぐ地上に物いひにける

日光のてれるがなかにしんとして芝居するなり三味線が鳴(な)り

稻むらのなかよりをどりいでにける定九郎はも地にのめりたり

身もだへて地にのめりたる定九郎三味ふつつりと鳴りやみにしか

おやまはも白き顔してふところでうしろでみせぬ、空をあふぎて

人らみな若きこころを傾けて日光のなかに野(の)芝居(しばゐ)をみる

身につつがあるが淋しくわがかたへ妻もみに
けり女ごころに

ややはなれ高笑ひせる群衆のこゑを野なかに
きくはよろしき

＊

何といふいたはしさぞもわが心愚に強く燃え
てやまなく

むしむしと日のこもりたる野のなかに汝れを
おもひてわがめまひしぬ

わが肌に光さし入りしみじみと痛みいでけり、
春の野面(ぱら)に

わが愛をまつたく享けもいるるべく力かよわ
き汝を悲しむ

わが生命うつうつとしてこもりたり野面は赤
し春の夕日に

うつうつとこもれる生命一本の烟突の黒さ野
はみどり敷く

わが愛はおろかに強く飽く知らずとおもひて
熱き息はきにけり

兵隊のその健康のかなしさよ野面ぬくみて日
のさしにけり

てんとをば白く野面に兵隊が張りをり草の芽
を踏みにつつ

*

うす濁りところりとしたる死に水に魚のあへぐ
をみてありしかな

この魚もやがて死ぬらむおもさうな水に浮き
たるみればなやまし

あへぎつつ死ぬがにすなる魚をみて二人は物
をいふとせざりし

＊

あま酸ぱき熟れすぎにける木の果などはめる
に似たるこの心かも

なよなよと動く金魚をみてゐしとおもひしに
妻のねてありにけり

青白き妻の素顔は産科醫院のしろき寢臺に眼
をひらきける

森かげのこのぼろ〳〵の廢屋の牛乳屋の壁の
そとの赤甕

大きなる赤甕がふせてありにけり軟らに黑き
五月の地に

＊

屋根瓦剝ぎて地上に投げおろす音は暗かり五
月のゆふべ

我が家の瓦をはげる屋根上の男の足の太くみ
じかし

麥畑のなかの桐の木若葉して日におよぐなり
五月のまひる

六月の日光烈しく照りつくる野の、青草のなかを走れる鐵路の上、一青年ありてその痛ましき屍を横へぬ。

くさいきれ草のにほひかなまぐさきこの日光
のあぶらぎりたる

二すぢの鐵路光りてまつすぐに日に遠みかも
この草いきれ

おもひつめ轢死とげたるわか者の屍おほふし
ろき荒菰

屍をおほへる菰の沈默の日に光りたりこのく
さいきれ

隱亡(おん)は愛すべき顏を日にむけつ死骸のそばに
畑草すへるも

死人の下駄が二つそろへておかれたる鐵路の
ほとり、日がてりつくる

人間の生き身を轢きし血のにほひ草のにほひ
のたへもせられず

わが足にふるる夏草汗ばみてべつとりとつく
ながき夏草

とあるときとある街の家にて、三首

扉をひらきつめまひしてわが身入りにけり窓
なき部屋の一脚の椅子

とかくしてふとわが顔をみまほしき心燃えた
ち鏡をもとむ

椅子によりて静かにながめいりにけるわが手の指の魚に似るかも

＊

しやきしやきと樫の青枝刈る男、鋏鋭き音たてにけり

青き葉を刈りつくすべく音たつるその大鋏日に光るなり

わがこのむ鐵砲百合のしめりたる砂まみれなる鉢のてざはり

しめりたる黒土の鉢わが指につめたく沁みる黒土の鉢

＊

うつとして裏白の葉の大きなる毒草ぞ光る肌赭き地

きやべつ車

ひとくるまきやべつ車のきたりけり野なかの
道のはば廣き上
大麥が刈り乾されたる畑中の赤土道のきやべ
つの車

青くさき野菜のにほひ日のにほひ畑中道のき
やべつの車

青ききやべつの一葉剝(はが)せば六月の土のにほひ
の日に新たなり

大きなるきやべつを一つかかへつつ我が家の
方に歸る、日なかを

病める弟をおもひて

ひとりぼつちの心を海の方にむけ弟よ病むか
旅館の二階に

いちはやく麥藁帽子買ひにしといふ弟の心か
なしも

日の光海いつぱいにひろごるも弟のかなしみ
も海いつぱい

向日葵畠

大正三年作

自大正三年六月
至大正三年七月

五月二十八日、産婆來りてわが妻を初診す。胎兒の心臓音聞えず胎動なきはその死を語るものなりと暗示す。(その誤診なりしを知るによしなかりき)吾外より歸り來りて妻の語るをきき、ひたすらに驚き悲しみて歌へる歌

わが妻の胎兒(たいじ)の呼吸のきこえずとひそかにいふにおどろきやまず

死にしか死にしか否か死にしかわが胎児呼吸
せぬといふにせんすべもなし

妻の胎に死児が眠りておもらかにありと思ふ
に堪へられもせず

妻の胎暗くおもらに児は死にてありと知りけ
るこのゆふべはも

日光にふれずして死にしわが妻の胎の児おも
ひ飯はまれざり

生きうづめさるるに似たる苦しさに心くらめ
り死にしとききて

両手もて顔をおほひてわが妻のいつまでもい
つまでも物をえいはず

五月くらく暮れてゆくなり夕空に鐵板を擊つ
響き重くして

＊

五月くらし死にし胎兒をおもふ夜の野草のい
きれたへられもせず

呼吸つまるごときおもひに夏草のいきるるな
かを歩みゐしかな

太陽の熱のこもりて蒸せる夏草のなかにこの
身を悲しみにけり

わが嬰兒胎ごもりつつ死にしてふこのおそろ
しさ夜のねむられず

闇の夜をふとしも吾兒の身うごきのせずやと
妻をよびさましけり

わが妻の死にし嬰兒をうむといふにいたましくして眼をひらかれず

甦ることもあらむとふとおもひ忽ちこころあかるくくらく

死にし兒をみごもりてあるわが妻の心をおもひねがへりにけり

いかにして兒は死ににけむ夜を一夜そのよりて來し過ぎし日おもふ

身のぬくみこもれる胎にみごもりつ死にし兒おもふ何の因果ぞ

友の兒は皆こころよく生れしにわが兒死にけり何の因果ぞ

向日葵の歌

向日葵は金の油を身にあびてゆゝらゝと高し日
のちひささよ

おもひおこすわがふるさとの古家の裏にかが
やく向日葵畠

夏の日の向日葵畠しんとして物おそろしき向
日葵畠

向日葵畠むかふの小舍のうしろには隣の婿の
壁ぬるがみゆ

壁をぬる隣の婿のくろぐろと壁をぬるみゆ向
日葵畠

淋しさうにうしろ姿を吾にみせ壁塗をせる彼
の破れしやつ

ぐぐと白き豚が一疋鼻さきを地に押しあてて
啼いてゐたりけり

向日葵畠の隅の豚小舍十あまり無智のうから
の尊かりけり

日の赤きゆふべなりけり白牡豚壁板破りおど
りいでたり

いかにこのましろき豚の肉太(ししざと)の豚の逃げいる
向日葵畠

わがもてる細き青竹ひしと鳴り豚の背をうつ
そのこころよさ

赤ぎらふ夕日の前の道化者うたれてにぐる豚
のよろしも

向日葵畠ひた啼きめぐり啼きめぐる我が白豚
の尾が日に光る

畑土のなかに鼻さき突きいれて彼れは金茶の
眼を光らせつ

わが家の作男狂人老爺
富藏の歌

大藪が渦をまきゐるあらしの日わが富藏の氣
が狂れにけり

ひるもなほ暗きくゞべにうづくまりわが富藏
の物思ふ顔

わが家のくらき納戸の長持に腰かけてゐし富
藏の顔

冬の夜の暗きくどよりのつそりといで來し彼
の眼の光りたる

富藏が手の大鎌のひかりけりその大鎌のくさ
かり鎌は

油部屋の暗き隅なる壁の上かかりし鎌のその
大鎌ぞ

氣狂ひが鎌をもつたる眼の光り冬のゆふべの
くらがりの土間

ところところと音たてて古き水甕に泉水おつるな
り冬のかはたれ

富藏はわがかくれ穴掘るといひて冬空寒く大鍬をふる

竹藪の崖にむかひて鍬をふる富藏の心かなしかりけり

竹藪のなかのほそみち一すぢに駈けあがりたる狂者の心

鋪石道

妹といかでおもはむ日が燒くる鋪石道に袖ふりぬとも

おもやつれしたる女のうちしほれ行くを妹といかでおもはむ

久しくも相みぬゆゑに兄妹はおもかはりして
眼をみはりけり

日の燒くる舗石道を行きにけり人の妻なる妹
のやつれて

ほつかりと熱をふくみし死に風の顔にふれけ
り路地をのぞけば

手あつればやけもやせなむ眞夏日の舗石道に
眼をおとしゆく

妹が嫁きて二夏いまだその婿をえしらず家を
えしらず

つくづくと知らぬ人おほしふるさとの第二の
母もいまだしらなく

繼母を知らず二人の妹の婿を知らずまことに
淋しく年は過ぎにけり

日に焼け道妹はみごもりてありにけりとおも
ひ高き家仰ぎけり

妹の路地の奥なる家おもひ舗石道になみだを
おとす

護謨の若木と
椰子の實

椰子の實の青く芽ぶくときくさへにそのなつ
かしさかかへてかへりし

銀座なる五番館の店の硝子戸のなかにさ青に
芽ぶきし椰子の實

我が部屋の椅子の上にて椰子の實が青く芽を
ふく夜のたのしさよ

あをあをとさらにさ青に芽を吹きてあらばと
今宵眼をとぢにけり

一鉢の護謨の若木の前にしてわが心いましづ
かなりけり

一樹の護謨その青き葉のはばひろく厚きに强
き日の匂ひする

顏近く護謨の若木によせにつつ七月の日の光
りを感ず

生くる日に

終

大正三年九月五日印刷
大正三年九月十日發行　定價九十錢

著作兼發行者　東京府豐多摩郡大久保町西大久保二百一番地　前田洋三

印刷者　東京市麴町區下六番町十七番地　松澤玨三

發行所　東京府豐多摩郡大久保町西大久保二百一番地　白日社
振替口座東京二六一六三番

發賣所　東京市神田表神保町　東京堂
振替口座東京二七〇番